



この史料は上野国の博徒を代表する国定忠治（長岡忠次郎）の天保13年（1842）の手記書で、月夜野町中岡家に残されています。日光の円蔵と赤堀の相吉も同時に指名手配されました。この人相書によると、「忠治は中肉中背でやや太り気味、鼻筋が通る色白の男で、髪は大たぶさで眉毛が濃く、力士みたいな体つきをしている」と記しています。なお、忠治について幕府代官の羽倉外記は、「忠治は丸顔で顔色が白く、肥満型である」と記し、また忠治の肖像画を残した足利の画家田崎早雲は、「忠治の顔は四角で眉毛が濃い」と書き残しています。一方、逮捕した忠治を江戸の評定所で取り調べた小保景徳は、「定めて大悪人の相貌あらんと思いましたが、案外柔弱の様子で、柄も小作りでおとなしい」と語っています。

（参考資料）『群馬県史』通史編6 296～321頁

人相書

国定村

無宿

忠次郎

当寅三十才余

一 中丈（指）、殊の外太り候方（指）

一 顔丸く、鼻筋通る

一 色白き方

一 髪、大たぶさ（鬚）

一 眉毛こく、其の外常軌（指）

一 角力取共相見え申し候

日光

無宿

円蔵

寅四十五才

一 ひたいに擦これ有り

一 丈ひくき方

一 やせ形、顔細長く

一 鼻筋通り、色黒き方

一 髪、目・耳常軌

一 言舌下野なまり

赤堀村

無宿

相吉

当寅二十四五才

一 この音人相知らず

右の外、同類四、五人これ有り候

*無宿 定まった住居と職業をもたない浮浪人／大たぶさ 鬚髪の大ぶさ／とどろき 大きく取つて頼んだもの／常軌（普通の状態）／言舌（しゃべりかた）